

論文 (Article)

遊戯折り紙研究考(4)

——わが国幼稚園創設期の折り紙教育について——

A Study of ORIGAMI Part 4: Education of ORIGAMI
for the Japanese Kindergartens in the Epock of the
Fowndation

大森 隆子
Takako Omori*

キーワード：折り紙、畳紙、東京女子師範学校附属幼稚園創設時の保育内容

1. はじめに

筆者が検証した¹⁾ように、折り紙のルーツが室町時代に確立した武家の儀式用折形にあることはほぼ定説となっている。その折形が、江戸時代に入ると市民生活の祭礼や実用の具として定着し、何らかの経緯から特に女子教育の一画を占めるようになる。他方で庶民の生活を彩る遊びやデザインとして、また商売の具——客寄せ用の大道芸や商品のおまけとして供する他——として、さらに女性の着物や欄間の模様としてなどなど多面的で豊かな展開をみせるのである。それらは、江戸末期の多くの資料²⁾から検証できる。

この折形や折り紙が、明治の世では新しい学校教育の場に教材として取り入れられていく。明治初期に誕生した幼稚園は、ドイツのフレーベル式を踏襲した欧米流だが、当初より日本の折り紙が教材として存在した。欧化主義の思潮の中でスタートした幼稚園は、ドイツ人保育者や翻訳文献を頼りに進められたことから、日本の伝統的な庶民の遊びや唄・お話などが排除される中で、折り紙については保育教材として位置を保ったのは何故だろうか。その後の教育の場における折り紙の盛衰史を考える上でも、初期の在り様とその起因を考察することは必要不可欠なことと思う。

本稿では、こうした問題意識(1)に立ち資料を辿ってみたい。先行研究例として梶浦真由美の論考を押さえ(2)、次に明治初期の資料を文献面から2点(3、4)、さらに現場の記録(5)という順に検討する。これらを通して、折り紙教育の原点と今後の課題(6)を明らかにできれば考える。

2. 梶浦真由美の説について

梶浦は「明治・大正期の幼稚園における『折り紙』³⁾」の冒頭で、この研究の意図について以下のように述べている。

筆者は拙稿において、そのうち幼児教育でなじみ深い遊戯折り紙を取り上げ、その起源と普及について既存の文献・資料を整理しまとめた。(中略)江戸時代後期には折り紙の本も出版されるようになり、江戸中期以降をその普及期としてとらえることができた。その後、前述したように明治時代に入ってから、幼稚園や小学校教育において教材として折り紙が使用され、そのことが大きな要因となり、折り紙がさらに普及・発展したものと思われる。そこで、本稿では折り紙が何故明治・大正期の幼稚園の保育内容の一つに採用されたのか、そして実際に保育の現場では何が題材として選ばれ、どのように取り上げられていたのかを明らかにすることを目的とする⁴⁾。

このような主旨の下、梶浦はまず保育内容としての折り紙に関して、はじめに東京女子師範学校附属幼稚園の創立時から大正期末の幼稚園令発令までの期間の法令や文書を概括し、次に実践の視点から関信三訳の『幼稚園二十遊戯法』、谷口政徳『家庭教育幼稚園』などの文献、加えて当時の保育者の記録を検証した。

前者については、わが国の幼稚園は欧米のフレーベル式幼稚園を範とし、翻訳書やドイツ人の主任保母の助言を手掛かりに保育の内容や方法が定められ、実行されたことを確認した。梶浦は、折り紙の導入根拠を次のように記している。

同幼稚園は、フレーベルの教育原理の影響を強く受け、彼の創作した教育遊具一恩物 (Gabe) を操作することが主な内容であった。そして、このフレーベルの恩物の一つに折り紙が採用されていたのである。何故折り紙が恩物に採択されたかは、初等幾何の基本材料としての評価によるとされている。また、何故日本で生まれた折り紙がヨーロッパに伝播したのかについては、奇術師が手品の材料として使用したのがきっかけとされ、フレーベルの幼稚園がドイツで創設された1840年以前には、折り紙が海外に伝えられていたということになる。このように結果として、折り紙は、明治新政府の幼稚園制度施行の指針の中へ逆輸入されることになったのである⁵⁾。

すなわち、梶浦はフレーベルの恩物にある折り紙は日本から伝わったものという前提で論じている。氏はこの根拠を平凡社の『世界大百科事典』の以下の記述に置いている。それは、

日本で生まれた折紙のヨーロッパなどへの伝播は奇術師によるとされている。つまり手品の材料に折紙が使われたということである。レグマンの探索レポートには1870年代の話が出ているが、これよりずっと以前、折紙遊びは海外へ伝えられていたことは確かで、幼稚園教育の創始者F・フレーベルが幼児教材 (恩物) の一つにこれを採用していることからそれは明らかである⁶⁾。

という箇所である。しかしながら、他の辞典、例えば小学館の『日本大百科全書⁷⁾』やブリタニカ国際大百科事典などにはそうした記述がない。また、羽島のように日本とヨーロッパの古典折り紙は独立して発祥したという説⁸⁾を唱える者もいる。このように発祥地に関しては諸説相並ぶため、今後の検討課題として押さえておきたい。

梶浦は用語について、1877(明治10)年の「東京女子師範学校附属幼稚園規則」では、3科25子目と定められた保育科目の25子目の一つに「豊紙」として明記されていたこと、同幼稚園の保育科目の変更により、1881(明治14)年には「紙摺ミ」となったことなど、初期の頃の折り紙を表す名称の確認をしている。

次に、その内容・方法や目的について触れている。まず、幼稚園開設時の保育時間表⁹⁾から「満三歳以上から各組で週に一度一回45分間取り上げられていた¹⁰⁾」こと、同年の資料の「紙摺ミハ色紙ヲ与ヘテ、舟鶴ノ形ヲ摺マシメ以テ想像ノ力ヲ養フ¹¹⁾」との文面から、具体的な折り紙作品に鶴と舟があったこと、また、想像力の育成という教育目的が示されていたことに着目した。その後明治20年代に入ると、「各科目の保育時間は30分を越えてはいけな」とされ、例えば『紙剪り、紙織り、紙組ミ、紙摺ミハ主トシテ手指ヲ練習シ兼テ物形ノ製作色彩ノ配合ニ関スル工夫力ヲ養フヲ旨トス』というように保育の要旨も述べられていた¹²⁾」ことから、手業の練習に加えて、制作や色彩に関する工夫力が挙げられていたことを注視し、それが、1889(明治32)年の「幼稚園保育及設備規定」(文部省)の条文「手技ハ幼稚園恩物ヲ用ヒテ手及眼ヲ練習シ心意發育ノ資トス」では、手業や精神力の向上に置換され、それまでの想像力や工夫力という目的が落とされたことを指摘した。

またこの時期の折り紙の具体物として、つる、のし、かめ、ふくらすずめ、かきつばた、かざぐるま、ちょうちん、さんぼう、ちょうせんぶね、きつね、さくら、かわず、天神、ふくすけ、かにを図で紹介している。これについては、

他の遊戯では三角とか方形とか幾何図を模したものであるが、紙に関してはフレーベルの「幾何の諸形より著手し、墜に營生摘美の諸形式を造り出すべし」との意に反して、我が国流に解釈され、(中略)取り上げられていたようである¹³⁾。

と述べているように、幾何学の形式、生活の形式、美的な形式へと段階を進む恩物一般の遊び方とは違う、わが国独自の折り紙遊びに成り代わったことを確認した。

3. ウイーン万国博覧会の報告書

我が国では幼稚園が開設された時点より、折り紙は教材として取り入れられていたことが明らかにされているが、改めて資料に基づきその経緯を検証したい。そもそも

の切っ掛けは1873（明治6）年のウイーン万国博覧会における西洋の幼児教育の見聞にあるとみてよいだろう。明治維新後間もないこの第5回博覧会に、わが国は総力を挙げて初参加する。その意図するところは、「万国博覧会は日本の近代化のための重要な装置であり、西洋文明摂取の窓口としての役割が期待されていた¹⁴⁾」ことに尽きる。それは教育、特に幼児教育に関しても貴重な情報を得る機会となった。以下の文章がそれを物語っている。

教育についていえば、19世紀後半期は近代教育のシステムづくりの時代であり、「教育」は時代の課題であった。ウイーン博では、26の部門のうち最後の26区が教育にあてられ、さらに「童子館」が特別館として建設された。（中略）童子館は幼児教育の発展を期して設置されたものであり、そこに世界各国の幼児教育に関する出品物が集められていたのであった。（中略）また、「童子館」については、近藤真琴による見聞録が『博覧会见聞録別記子育ての巻』（1875年）として出版された¹⁵⁾。

この報告書もベースの一つとしてわが国の幼稚園のイメージが出来上がり、開設へのルールが敷かれていくことになる。湯川によれば、この時出された報告書全体は次の通りである。

『澳国博覧会報告書』の教育部は上下二冊にまとめられ、「澳国学制」（相原重政、平山成一郎共訳）、「独逸国学制論」（平山成一郎訳）、「近世独逸記教育部抄訳 独逸学制論」（平山成一郎訳）、「学校科目」、「千八百七十四年英国年鑑教育部抄訳」の五編の翻訳と、佐野常民の意見書である「教育普施ノ方案報告書」が収められている¹⁶⁾。

この中から折り紙に関する記述をあたってみると、「澳国学制」の「童子園」の記述に該当箇所がある。以下に抽出した保育科目の第二の文中にある下線部分（筆者が引く）である。

第一 身体運動 手足運動 歩行

第二 家屋雛形ノ構起 小木片ヲ聯列スルコト 紙ヲ以テ物体ノ形を切裁シ或ハ作造スルコト 麦藁細工 樹枝ヲ以テ家屋ノ形ヲ作ルコト 針巧及挑織 図工 針画 粘土ヲ以テ鳥獸ノ形ヲ作ルコト（以下略）¹⁷⁾

ここに記されている物体の形が何を指すかに関しては書かれていないが、全体の文脈から家屋、鳥獸などがその一つにあったように受け取れる。

上述した近藤真琴による『博覧会见聞録別記 子育ての巻』を見ていくと、その中

の「初生の小児撫育の事」には、「一 躰のちからをつくる道具の事、二 児どもをして見る事聞く事等につけて心を用いさする趣向の事、三 児どもの識を増す趣向の事、四 女子のもて遊びの事女子の教育に用うる道具の事、五 男子の工業のもて遊びの事、六 フレーベル氏童子園の事、七 家の内にて幼き児に教授する事、八 貧しきものの児のもて遊びの事と8項目に渡り、性別、目的別に子育てに要する道具・遊具・材料などの紹介がなされている。折り紙に相当するものとしては、四の項目中の「其外五色の紙を折りたたみてさまざまの形を作らせ、あるいは切りぬき細工をなさしめ、又厚き紙にて菓子皿、手札皿などを作らせ、あるいは捧げ籠を作らせ（以下略）¹⁸⁾。」が該当する。ここでは、「さまざまの形」とあり、具体的にその形を提示しているわけではないが、後続文との関係で推測すれば、ままごとに要する品を示していると読み取れようか。

いずれにしても、紙を媒体に作る品が家や日用品らしきものであること、また、“剪裁と作造”、“形を作ると切りぬき細工”というように、異なる作業を一体化して記述している点は共通している。

4. 桑田親五訳『幼稚園』

1876（明治9）年1月に上巻、1877（明治10）年7月に中巻、1878（明治11）年6月に下巻という順に、桑田親五による翻訳で『幼稚園』が出版される。なお、校閲者として上巻には稲垣千穎・那珂通高、中巻には那珂通高・飯島半十郎、下巻には飯島半十郎の名が記されている。上巻は総論と第一の玩器（彩色ある小毬）、第二の玩器（毬・骰子・筒形）、第三の玩器（八個の立方体）、第四の玩器（八個の縦長の形）、中巻は第五の玩器（立方体と三角柱）、第六の玩器（大小の直方体）、第七の玩器（木箸）、下巻は手技である組紙・織紙・きり抜き紙・図を引く事と音楽、体操が紹介されている。

下巻に記載されている手技内容には明確な区別がなく、紙素材を種々の方法で作業することを紹介してある。組紙と織紙も模様の違いとして同種で扱われている。その後、**“平方の紙を畳む業”**という項があり、以下のような説明が付されている。

此業は前の業と同じ訳にて、稚児等己に別個の物を合せて全物を作るを知らば、原有形の外に種々の異なりたるものを工夫して製するに至るなり。この業を為さしむるには預稚児に其作るべき諸の物品の訳を細に知らしむるを肝要なり。此業は稚児等をして平方の紙片を持たしめ、初めは随意に物品の形を作らしむること、前の業の如くすべし。随意に物の形を作らしめたる後は教師種々の物形を解き明し、箱、籠、大舟、小舟、星辰等を作る事を教うべし¹⁹⁾。

このように、ここでは折り紙ないしそれに相応する何紙という言葉は見受けられず、**“平方の紙を畳む業”**と作業形態をそのまま言葉にしてある。また、方法に関しては、

初めは思いのまま自由に作らせ、その後に作り方を教えるよう説いている。作品としては、幾何学に通じる形作りに加えて、日常のさまざまな形を折った具体例（箱、籠、大舟、小舟、星辰）があげられている。これらが日本の伝統的作品に由来するものなのか、あるいはヨーロッパ発祥の作品なのかは判別し難い。しかしながら、星辰（星）についてはわが国の伝承折り紙とは違うような気がする。

なお、湯川は桑田の翻訳の原著はドイツ版ではなくイギリスのロンゲ夫妻の書であることを検証しており、その根拠として、「それが幼稚園教育の具体的方法をわかりやすく紹介した指導書として、当時すでに9版を重ねていた幼稚園の基本文献であったことを考えれば、同書が選択されたのも理由のないことではない²⁰⁾」という見解を示している。湯川による原著との比較（図1）を示す。下線部（筆者が引く）が該当箇所である。

<i>A Practical Guide to the English Kindergarten</i>	【幼稚園】
Introduction	総論
Some Account of Frederick Froebel, Founder of the Kinder Garten Schools	
First Gift; the Soft Ball	第一に授くる玩器 彩色ある小毬
Second Gift; Ball, Cube, and Roller	第二に授くる玩器 木の毬 散木形 の木 筒形の木
Third Gift; the Cube Divided Once in Every Direction	第三に授くる玩器 立方形の木を縦 横中と断ちて八箇にしたる散木形 の木
Forms of Utility	要用の式
Artistic Forms	精巧なる形
Mathematical Forms	数学の基
Fourth Gift; a Cube Divided into Eight Planes Cut Lengthways	第四に授くる玩器 立方形の木を縦 に長く八箇に断ちたる木
Fifth Gift	第五に授くる玩器
Sixth Gift	第六に授くる玩器
Laying Sticks	第七に授くる玩器 箸細工 小なる 木箸
Peas Work, or Sticks United by Peas	箸細工附録 豆にて小箸を接ぎ合す る業
Plaiting, Folding, Cutting, and Prick- ing Paper	組紙、織紙、折り抜き紙及図を引く事
<u>Paper Folding, with an Undivided Square Form</u>	<u>正方形の紙を畳む業</u>
Cutting Paper	紙を折り抜き業
Drawing	図を引く業
Modelling	模を造る業
Musical Gymnastic Exercises	音楽の体操の事

図1 『実際の手引』（ロンゲ夫妻によるイギリス版）と『幼稚園』（桑田訳）の対比
（出所：湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房 147 頁～148 頁）

5. 創設期の幼稚園における折り紙教育の実情

この頃の折り紙の実践光景（図2）を関信三編纂の『幼稚園法二十遊嬉』から引いてみる。これをみると、幼稚園の女兒がのしと鶴を折っていることが分かる。



図2 第十八恩物摺紙法

(出所：『明治保育文献集第二巻』日本らいぶらり 41 頁)

東京女子師範学校附属幼稚園と縁の深い倉橋惣三によれば、創設時の保育内容は、「開園当初より十四年までは、幼稚園に於て如何なる保育科目を用ふべきかについては、何らの規定が無かった。ただ、女子師範学校附属幼稚園に於て、当事者諸氏によつて定められた三条の科目と、是れに含まれた二十五の子目があったが、文書となつて公にされたものでは無く、この附属幼稚園のみの内規とも云うべきであった²¹⁾。」とあるように、物品科、美麗科、知識科の3科の下、25の子目が設定されていた。その内の22に畳紙が第十八恩物として置かれていた。これについて、倉橋は以下のように説明する。

是れのみが幼稚園の手技と定められていたかのように創立当初からかなり長い年月盛んに用ひて来たのである。これは我が国に於いても、家庭で或は寺子屋で盛んに用ひた幼児時代のあそびの一つであつたために、二十遊戯の物の中でも最もたやすく幼稚園へ取り入れることが出来たからであらうと思はれる。それで他の遊戯では三角とか方形とか幾分幾何図を模したものであつて、フレーベルも、「幾何の諸形より着手し遂に營生摘類の諸形式を造り出すべし」と云つては居る

が、畳紙は従来から我が国風のものがあつたからであろうか、のしとか、鶴とかいふものが多かつたのである²²⁾。

文中では、のしと鶴の名が挙げられているが、付随の絵(図3)には舟・かぶと・せみ・箱の4種が示されている。この時代を生きた倉橋(1882年～1955年)の発言だけに、江戸末期から明治の初頭にかけて、折り紙が幼児の遊びに位置づいていたことの証左になるかもしれない。

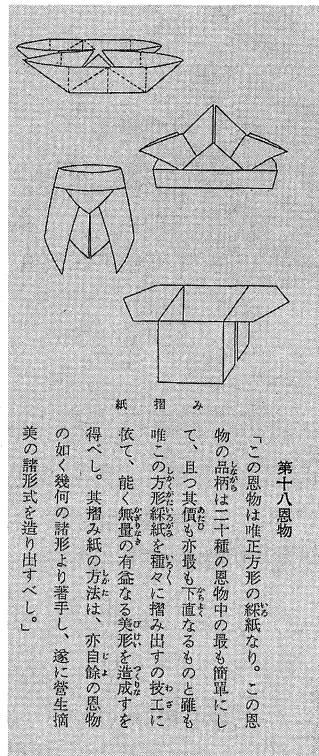


図3 第十八恩物(倉橋惣三の記述による実際に行った保育科目)
(出所: 倉橋惣三・新庄よしこ共著『日本幼稚園史』フレーベル館195頁)

他に、開園間もない明治11年2月より約1年、東京女子師範学校附属幼稚園に保母見習生として保育を体験した氏原長は自身の手記の中で、折り紙に関して次のように記述している。それは、「又色紙ノ如キモ外国ヨリ取り寄セタルハ皆洋紙ナレハ之ヲ日本紙ノ西ノ内美濃紙ニ染メサセタルニ之モ思フ様ニ染メ上ラス度々之ヲ改メサセテ適当ノモノヲ得タリ又恩物図形モ摺ミ紙ノ如キハ外国ノモノハ美麗式ニ属スル生体形ノミナレトモ之ヲ我国古来ヨリ有ル鶴三宝菖蒲香箱ノ如キ立体ヲ加ヘテ出版セリ²³⁾」というもので、折り紙用紙を作り出すにあたっての工夫や苦心を彷彿とさせ、そもそもフレーベルの第十八恩物(摺紙)の作品事例にはなかった日本伝来の鶴・三宝・菖蒲・香箱といったものを、新たに加えたことを明かしている。

6. まとめに代えて

以上、わが国の幼稚園創設時に絞って、わが国伝来の折り紙が教材としてどのような名称や形・目的・方法などで導入されたかを考察した。折り紙の名称としては、「畳紙」、「紙タタミ」、「摺紙」といった用語が当てられていた。これは、江戸時代の「折形(おりかた)」や「折据(おりすえ)」、あるいは江戸末から明治にかけての「折りもの」といった言葉とは異なる名称を採用したことになる。このことから幼稚園教材としての折り紙は日本伝来の折り紙ではなく、フレーベルの恩物の Paper Folding として取り入れられたことは確実であろう。また、その目的に想像性や工夫力・随意性がおかれていたことにも、フレーベル精神の反映を感じる。

フレーベルの折り紙作品は、幾何学模様を折り出すものに加えて日常品やデザインに特化したものなど3パターンある。その中の日常品に、鶴やのしなど日本の作品を差し込んだことが、現在に至る幼稚園の折り紙のそもそもの端緒ではなかろうか。入れ込む、ないし差し替えた人物の一グループは、豊田扶雄を始めとする東京女子師範学校附属幼稚園の保育関係者や前述した氏原など保母見習い生たちであろう。おそらく彼女等の教養の地平で習得していたものを、実際の保育場面において、それを教えるのが自然なこととして展開されたものと思われる。しかし筆者はその他にもわが国の伝承折り紙に造詣の深い文化人が関わったのではないかと考える。その一人として着眼したいのが、桑田親五訳『幼稚園』の中巻と下巻の校閲に関わった飯島半十郎という人物である。氏は、幼稚園教育の専門家というわけでないにもかかわらず、その後明治18年に『幼稚園初歩²⁴⁾』を出版しており、その中に、折物という項で、40余の折り紙作品を図入りで紹介している。雄蝶、雌蝶といった儀式折形や百鶴といった江戸後期の希少な折り紙作品、大人や子等が当時楽しんでいたと考えられる作品などが掲載されている。氏の足跡を検証することで、明治期の幼稚園における折り紙教育について、新たな側面が拓かれるのではとの期待がある。今後の課題としたい。

■注

- 1) 大森隆子「遊戯折り紙研究考(1)」(『椋山女学園大学教育学部紀要 Vol.2』2009年、所収)
- 2) 高田智『おりがみ 古典にみる折り紙』日本折紙協会、1993年他
- 3) 梶浦真由美「明治・大正期の幼稚園における『折り紙』」(『北海道文教短期大学研究紀要』第24号、2000年、所収)
- 4) 同上、p.1
- 5) 同上、p.2
- 6) 下中直人編集『世界百科事典』平凡社、2007年、p.392(この項の執筆者は笠原邦彦)
- 7) 相賀徹夫編集『日本大百科全書』小学館、1975年、p.398(この項の執筆者は菩提寺悦郎)
- 8) 羽島公四郎「k's 折り紙: 折り紙の歴史」<http://origami.ousaan.com/library/historyj.html> (2011年10月31日)
- 9) 前掲「明治・大正期の幼稚園における『折り紙』」p.2

- 10) 同上、p.2
- 11) 同上、pp.2-3
- 12) 同上、pp.3-4
- 13) 同上、p.6
- 14) 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001年、p.63
- 15) 同上
- 16) 同上、p.64
- 17) 同上、p.65
- 18) 近藤真琴『博覧会見聞録別記 子育ての巻』（岡田正章監修『明治保育文献集 第一巻』日本らいぶらり、1977年所収、p.69
- 19) 桑田親五『幼稚園 下巻』（岡田正章監修『明治保育文献集 第一巻』日本らいぶらり、1977年所収、pp.301-302
- 20) 前掲『日本幼稚園成立史の研究』p.147
- 21) 倉橋惣三 新庄よしこ『日本幼稚園史』フレーベル館、1956年、p.161
- 22) 同上、p.194。
- 23) 竹村一『幼稚園教育と健康教育』1960年、ひかりのくに昭和出版株式会社、p.136
- 24) 飯島半十郎『幼稚園初歩』（岡田正章監修『明治保育文献集 第四巻』日本らいぶらり、1977年所収）